

---

# 巴マミの救い方

佐藤太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巴マミの救い方

### 【ZPDF】

Z2987S

### 【作者名】

佐藤太郎

### 【あらすじ】

これは、ひとつ理不尽に抗ったひとりの少年の物語。  
もう一度と語られることの無いそれは、脆く儂い空想か  
(注意、この小説は短編のつもりで書いたため一話の長さがおかしな事になります、さらに矛盾点やら公式との相違まで訳が分からぬこともでてくるかもですが、ご理解ください)

## 第一回世界（前書き）

こんにちわ、私です。知ってる方はお久しぶりです、知らない方は始めまして。

：こんな挨拶してみたかってなんです、すいません。

突然ですが、この小説じつは新作ではないんです。

今書いてるもののは息抜きに書いてたんですけど：こっちが纏まつたので投稿してみました。

ですので、皆さんも適当に読んでください、どうぞ。

## 第一回世界

気がついた時には……全てが死んでいて、全てが終わっていた。

言われた通りに姉さんの帰りを信じて待つていただけなのに。

大丈夫つて言つてたのに、死んだ。

夢だ夢だと思いながらも、俺の本能がコレは現実だと呟んでいた。

本当だとしたら、理不尽だ、こんな世界狂つてゐる。

ビリでも良くなつてゐた、もはや绝望すらり心地いい。

誰か、誰か助けてよ、いや殺して? 壊して?

こんなおかしな世界、死んでしまえ。

「わ、全くおかしな事だね」

そう言つたのは白い狐だった。

いやアレは狐じゃない、この世界の常識じゃ通用しない何か。

「どうしたんだい? 僕の話を聞いてる?」

「……立て続けに起きた信じたくない事のせいだ、俺の頭はおかしくなつたよ。」

「全く聞いてないみたいだね」

「も、も、どうだつて良い… 姉さんがいない世界に生きても…

「やの姉の姉を生き返らせるとしたら、」

「… なんだつて? も、も、一回生き返らてくれる?」

最早何も考える事が出来なかつた筈の俺は、その一言で、当たり前のように活力を取り戻した。

ファンタジーだつと、メルヘンだつと… 姉さんが生き返ればそれで良い。

「だーかーら、君が魔法少女になれば、お姉さんが蘇るんだよ」

「魔法… 少女?」

ますますおかしくなつてきた、思わず笑つてしまつた。

「ああ、君は男だから… そうだね、魔法少年つて、」

「なんだつて良い、早く姉さんが生きかえる方法を教えてくれ」

一秒だつて待てない、後一回おかしな前振りなんでしたら、口イツをぐぢやぐぢやにしてやつても構わない。

「せつかちだね、君は… 願い事を僕に言つて、せつしたら君は凄い魔法少年になれる」

願い事？そんなの決まってる。

「姉さんを生き返...」

そこひまで言つて思つた、これで良いのか？と。

姉さんを生き返らせたとしても、またあの化け物に立ち向かうだらう、そしてもう一度死ぬ。

そんなの……ユルサナイ。

「凄い魔法少年？」

「ああそうとも、君の力は底知れないよ、男だつての元

そつか、だつたら…

「運命も変えられる程に？」

「…努力しだいだね」

はは、どんな事だつてやつてやるや。

「俺の、願いは…」

ああそうだ、これで良い…ここつで良い。

「」こんな醜い世界を変える力が欲しい…」

ワルプルギスの夜によつて終わる世界  
終了

# 第一回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第一回世界（前書き）

引き続げるべし。

## 第一回世界

あ、れ？

「じいはどうじだ？なんだこれ。

「あら、やつと起きた？全くもう、智哉は相変わらず、ねじやくわらう」

ああなんだ…ちゃんと成功したんだ。

田の前に姉さんがいた、死んだ筈の姉さんが。

それどころか田付けも随分前に戻っていた。

たぶん時間が巻戻ったのだろう、それで姉さんが生き返った。

それだけの話。

そんなムシの良い話あるわけないじゃないか。

-----

時間を巻き戻してもマミ姉さんは魔法少女だった。

結局一緒に死んだ。

ただ違ったのは死に方だけ。

今度は「まじか」って言ひ女の手を庇つて姉さんは死んだ。  
なんだそれ、俺が生き返らせたのに…そんな事あるかよ、許せるか  
よ。

だけど俺がその子を恨んだところで変わらない、全へ変わらないんだ。

なにひびつある？死んじゅえば良いんじやない？ああそりが、死んじ  
やえば良いのか。

じやあ死のう。

俺は躊躇つ事なくマンションの屋上から身を投げだした。

馬鹿みたいに簡単だった。

〔E〕マミが魔女に殺される世界 終了



## 第一回世界（後書き）

感想や「」指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第二回世界（前書き）

引き続げる。

## 第三回世界

目が覚めた……覚めたんだ、覚める筈無いのに。

目の前には姉さんがいた。

カレンダーやを見るとまた日付けが戻っていた。

それから、前と違う事があった……姉さんが魔法少女じゃなかった。

普通の暮らしをしていて、家族も皆生きて……

……そうじゃないか、良く考えてみろ、俺の願いは時間を巻き戻す事だったか？

違う、世界を変える事だろう？

だったらこんな風に齟齬が出るのもおかしくない。

まだ確定ではないが、この世界を変える力が俺の能力だと仮定したら？

……話は早い、マミ姉さんが生き残れる世界を見つければ良い。

とにかく、この世界で正解じゃないか？

魔法少女には危険が伴つ、ならこの世界で安心して暮らせれば……

とにかく、世界が変わってるなら……もしかして魔法少女なんて存

在も無いのかもしね。

まあ、そんな夢は一瞬で碎かれたが。

「驚いたなあ、知らない魔力反応がしたもんだから急いで来てみたら、まさか男だったとはね」

「分かつた事追加、まだ確定じやないが世界にはファンタジーが付き物らしい、俺に言わせりや憑き物だ。

「おーい、僕の話聞いてる?」

「取り敢えずマミ姉さんには近付かせない様にしないとな、姉さんならいつかり魔法少女になりかねない」

「全く聞いてないみたいだね」

「おーい、おーい」と、

「つこでにだけど、君のお姉さんは魔法少女にはなれないよ」

「は?」

「お姉さん、ちょっと魔力が弱いみたいだから、他の子優先になるだろつて事だ」

「え? じゃあ姉さんは…」この世界では魔法少女になれない?

…やはりこの世界な。

「や、話してくれるかな

「ん？ 向をだ、キュウベえ」

「やたら喋る由に生き物はキュウベえと並び、前の世界で姉さんが言ってた。

今の所一番の情報通だらうな、魔法少女になるのも一つ経由だし。姉さんは仲良しひしてたが……どうも隠し事をしてる様だ、少し気にかかる。

「やうそれとか、なんで僕の名前を知つてるとか、どうやって魔法少女になつたかともね」

魔法少年だ。

しかし、べらべら喋つて良い物か…キュウベえは信用出来るんだろうか。

「なんだと話さなきゃならないんだ？」

「君にお姉さんの情報をあげただらう~」

なるほど、情報交換つて事か。

なら、少しくらいなら良いかもしれない。

慎重にいきたいが、俺にキュウベえを疑つカードは無い。

「こちらの情報を明かすのも手だろ。」

「見ての通り俺は魔法少年だ、契約以外の方法でチカラを手に入れ  
た」

少し嘘を混ぜながらだけど、な。

「そんな馬鹿な」

「力の内容は秘密、信じる信じないは勝手にしてくれ

キュウベえが信用出来ると判断したら教えよつか。

「そうだ、ソウルジエムを見せてくれるかい？」

「ソウルジエム？」

「何だそれは？」

「まさか知らない？ 魔法少年なのにソウルジエムを？」

「……だから何だそれは？」

「ちょっと待つてね……ああ、ある、きみの右ポケットの中だ、気  
づかなかつたの？」

促された様にポケットを確認すると何か入っていた。

「ああ、コレか……知らない内に持つてたんだ、これがソウルジエム  
か」

「本気で言つてる? だとしたら物凄い無用心だね、それは魔法少女には無くてはならない物だ」

だから魔法少年だ。

「うん、ちょっと濁つて濁つてるね」

「うん? 濁つたら駄目なのか?」

「駄目といつかなんと言つたか、そこまで知らないの? 本当に僕から契約した様には見えなくなつてきたなあ」

契約したんだけど、良い具合に勘違ひしてゐみたいだ。

「だからもう言つただろう? で? どうなるんだ?」

「... 魔法が使えなくなる、魔力が切れるつてやつだね」

つてえ事はだ、俺はもう一回.....違つた、契約した世界も合わせて一回魔法を使つてる、それで。

「こんだけ濁つてる...」

このままだと、多く見積もつて後八回くらいしか魔法を使え無いな。

「ああ、大丈夫だよ、魔女を倒してグリー・フシードを使えばソウルジムの穢れは取れる」

.... そいつはまた、益々やつかいだな。

戦闘能力皆無の俺の魔法は必然的に単発になつたという事か。

つまりチャンスは後八回。

「どうかした？」

「いや、特になんでもない、バツクリしただけ」

「そう、君は魔法少女の事、あんまり深く知らないみたいだね、困つた事があつたらいつでも呼んでよ、またね」

そう言つと、景色に解けるようにキュウベえは泣えて行つた。

姉さんは魔法少女にはなれないらしいから取り敢えずキュウベえと魔女、それから鹿目まどか周辺人物、ここいら辺を注意しておけばマミ姉さんに害は無いとおもう。

そつと決まれば。

直ぐさまノートを開じ、自分の部屋を飛び出した。

隣の姉さんの部屋の前に立つ。

いつも緊張してしまう、姉弟なのに、どうしてだろ。

いや分かってる、あの姉さんの身のこなしがだらうな。

とても中々に見えない。

声をかけよつかノックをしようつか迷つて、結局せがりも行つ。

パソコンピュアをノックしながら声をかける。

「姉さん、いるよね？」

「智哉？ 入つて良いわよ」

良かった。

まあ、姉さんが入るのを拒んだ事なんて無いけど。

言われたように中に入るとい、姉さんは週刊やつに読んでいた。

「どうしたの？」

「えつと、姉さんの友達に鹿田まじかさんつてこるへもしくは美樹さやかさん」

「ええ、一つ下の後輩よ、智哉も知り合つなの？」

いきなり心臓の音がデカくなつた。

まさかもう知り合いだつたとは、もしかして、もつ姉さんは巻き込まれてる？

「いや、友達がその人達を変な感じの子とかなんとか言つててさ… その子達さ、なんか変なこと言つてたりしない？」

「変な」と、

……動搖しない？じゃあやつぱり姉さんは魔法少女関係には関わっていないのか？

「うう、えっと……魔法がナントカ……」

「魔法？良く分からないわ、2人とも良い子よ」

「やつか……」

やつぱりハズレだな……当たりだったとしてももう関係無い。

たとえ鹿田まどかが魔法少女だったとしてもだ、といつもその方が俺としては万々歳だろ？、魔法少女関係は鹿田まどかに押し付けられる。

「その友達に何吹き込まれたか知らないけれど、人を噂や見かけで判断するなんて失礼よ智哉」

う……姉さんに怒られるのは辛いな。

「……」めんなさい

「ふふ、分かれば良いのよ……あ、新しいの買つてきたの、飲む？」

俺の頭を撫せながらそう言つて、出してきたのは予想通りティーカップだった。

姉さんの淹れてくれる紅茶は格別美味しい。

「頂くよ、ありがと」

こんな毎日が、これから続く筈だ。

守りでやる…守り抜かなきや、そしこなこと俺は…

-----

一週間、べらつたある日、姉さんはいきなり帰らぬ人となつた。

理由は交通事故、姉さんはつねに注意を測つていたのに…少し気を抜いた瞬間だった。

まるで待つていたかのように、俺が気を緩めるのを待つていたかのように。

田マミが魔法少女にならない世界 終了

## 第三回世界（後書き）

感想や「」指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第四回世界（前書き）

引き続げるべし。

もつ、一度と無いだらう、姉さんが魔法少女にならない世界なんて。

そうだ、たまによく聞く話をしよう。

女の子がいました。

その子はとても「」チカラを持つてました。

その力でその子はとても幸せな暮らしをしていました。

しかし、世界はその子の存在を許せなかつたのです。

やがて、その子の強過<sup>アガル</sup>チカラに恐怖した世界は、その子の存在を消しました、おわり。

よくある話だらう。

俺はもしかしたら姉さんがこんな状態なんじゃないかと、絶望した。

次の世界はめちゃくちゃだつた。

鹿田まどか、彼女が魔女になつた……らしい。

らじこと血のせ良く分からなかつたからだ。

後でキュウべえに聞くと話してくれた。

魔法少女は魔女になる。

なんでも聞けば答えるとか、じゃあ今まで聞かなかつた姉さん達が悪いってのか。

ははっ、笑つちまつ。

ワルブルギスの夜を倒した時、その場にいた魔法少女は四人。

姉さん、鹿田まどか、暁美ほむら、美樹さやか。

この四人は見事ワルブルギスの夜を倒した。

しかし瞬間、魔力切れを起こした鹿田まどかが苦しみ始め、ソウルジエムから魔女が現れたと言つ。

魔法少女の魔文化、誰しも予想だにしなかつた事態に混乱し、全滅した。

錯乱して味方の魔法少女を撃ちまくる姉さんを見た時、少し最低な事を思つた。

そのまま姉さんは魔女に殺された、あつさりと。

最後に見た姉さんは…果てしなくきれいでむなしかつた。

鹿田まどかが魔文化する、この出来事は俺の行動を狂わせるには充分な出来事だつたろ？。

さらにはソウルジムに自分の魂があるとの事、簡単に言つと今  
体は空っぽでソウルジムが本体つて事だろつ。

キュウベえ、これから世界であいつは信用してはならない事がハ  
ッキリした。

キュウベえの目的は宇宙の寿命を伸ばすため、姉さん達の希望や絶  
望のエネルギーを採取する事だつた。

人一倍姉さんを大事にしてた俺はさぞかし良い餌になつてただろう。  
なんでつて、姉さんが死ぬ度に奴らは莫大なエネルギーを得られる  
からだ、俺から。

だから俺も魔法少女になれた、と言つ事だろつ。

結構情報は手に入った、これからは姉さんの死亡フラグを必死に消  
していかないとどううな。

手ぶらで死ぬわけにもいかないからね。

おつと、いつのまにか俺も死んでいた様だ。

鹿目まどかが魔女になる世界 終了

## 第四回世界（後書き）

感想や「」指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第五回世界（前書き）

引き続げる。

じゃあ次始めよう、そうだし分かった事。だいたいの世界で姉さんは死ぬ。

三度目の世界なんかそうだ、あの姉さんが交通事故なんてそういう起きるもんじゃないしな。

そういうレールがあるとしたら、俺はそのレールを変えるまでだ。

それと鹿田まどか、あいつもヤバそうだ。

鹿田まどかの魔文化、これは回避したい、問答無用で世界が終わる。

と言つわけで鹿田まどかを排除する事に決めた。

勿論姉さんにばれない様にだ。

排除するには早い方が良い、明日やつをと片付けよう。

昔から片付けは得意だつたんだ、どんなに散らかしても直ぐに綺麗に出来る、よく褒められたなあ。

その日の夜、俺はよく分からぬ事を考えていた。

俺は、鹿田まどかを殺そつとしているのだろうか？

何を今更、排除つてそういう事だらう？

心の中の黒い俺がそつぱい。

排除つて違う意味もあるんじゃないの？

心の中の白い俺がそつぱい。

じゃあどんな意味？と黒い俺。

.....。

はい、負け。

次の日、その日は平日。

俺は朝早く家を出て、事前に調べて置いた鹿田まどかの家の前に辿り着いた。

「こままでくれば後は簡単だ、出できたところをこのナイフで刺す。

そり、もつじを出でへる、アホ面晒しながら死ぬと良い。

別に恨みでも何でもないが死ぬと良い、姉さんのため。

「ヤレでなにをやつてゐのかしき？」

ぶわっと…全身の鳥肌が立つのを感じた。

なにか、ヤバイ物でも相手にしてるような、そんな感覚。

「そこで何をしてるの、と聞いてるのだけれど」

そんな事を聞いてきた黒髪の少女は丁度同じ年くらいの少女だった。だが、俺の本能が魔法少年の感か、どちらかが「コイツはマズイ」と告げていた。

「まあ良いわ、まどかを殺そうとしてる時点で貴方の運命は決まつたから」

声を出す前に俺は撃たれた、いや撃たれていた？

初めて段がんで撃たれたんだが……こんなに速い物だろうか、というかあいつ構えてたか？

まあとにかく、ジーナ<sup>ジーナ</sup>にサイレンサーまで付けてやがった。

それと、以外に冷静な自分の思考にビックリした。

何回も死んでればこうもなるか、いや俺だからか？

俺を鹿田まどかに見せない為かトドメを刺す為か奴が近づいてきた。

最期に見えたのが、そいつの何やら物悲しげな顔つてのが一番癪に触つた。

巴智也が暁美ほむらに殺される世界

終了

## 第五回世界（後書き）

感想や「」指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第六回世界（前書き）

引き続<sup>アシテ</sup>べん。

## 第六回世界

わあ、どうもうか、そろそろ本格的に動かなければ。

推定で後二回ほどしか無い、もつチャンスが少ない。

出来れば前みたいに姉さんが安全な世界に行ってくれると良いが、可能性は低い。

それに、そんな風に日和つても物語は動かない。

じゃあどうしよう、キコウベえでも殺してみよつか。

いや、危険だ、奴は何をするかさっぱり分からぬ。

実力も分からぬ相手と戦うとなるとキツイ物がある。

それに俺の命も後二回だぞ、考える、考えなきや。

。

。

あれ？

次の世界に行くのが遅くないか？

そういや今までこんな風に考える時間なんて無かつたよくな。

死んだらその瞬間スパッと、画面が切り替わるよつて次の世界に行つてたよつた。

何が起きてる?…どう言つ事だ?

そして、俺は最悪の事実を知つた。

詳しく言つと調べた、なんせ自分の能力だ、頭の中集中させれば今の状況くらい分かる。

なんてつたつて、この状況を作つたのは自分の能力だからだ。

こんな事になつてるのに以外に冷静だな、俺。

こんだけループ繰り返してたから、感覚鈍つたんだろうな。

いやー…くはは、なーんだそんな事だつたのか。

そりやそうか、こんな風に世界弄くり回してつや酔くらじ当たるか。

ああちくしょう……結局何も出来なかつたな。

残念だ、それに悔しいのは……最期に俺の事を姉さんが覚えてないつて事だな。

だつて……

だつてこの世界は……

巴智也が存在しない世界

改变者が存在しない。

つまり死亡する事が確認されない為、トリガーが引かれずにこのまま世界は進行します。

なお、時間操作は関与しない事とします。

## 第六回世界（後書き）

感想や「」指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第一話（前書き）

それでせんせー続かねーわ。

## 第一話

「全くそれ、本当に彼は最期まで訳が分からなかつたよ」

全く表情を変えず、たんたんと誰かと会話してゐる様に白い物は言つ。

「世界を壊して世界を作りなおす……これがどれだけ大変な事が分かるかい？普通の人だつたら発狂つてレベルを超えてるよ」

ふう、と溜息。

「それが可能な器だつたから魔法少女になれたのに、もつたいないなあ……1人のヒトを守る為に全てを廃棄するヒトなんて、僕でも頭おかしいと思つちゃうね」

すこし間を置いて、続ける。

「それに、その守りのヒト……巴マミだつけ？その子の家族はずつと前に死んでる、だから巴マミは魔法少女になれた、その時巴マミは天涯孤独になつた筈なのさ」

段々と口が登つてき、キュウベえの姿を照らし始めた。

「じゃあ、彼は……巴マミの弟の巴智也は誰だい？いや、一体彼は何だい？おかしいじゃないか、矛盾だらけだろ？」

白い体には痛々しい傷が走り、身体を横たえた状態で続ける。

「つまりこの物語は、彼の妄想の産物さ……いや違うね、妄想つて

のは彼の頭の中の出来事になってしまった……確かに世界改变は行われたからね」「

やがて、キュウベえは全く動かなくなる。

別の場所から声が続く。

「ワルプルギスの夜によつて世界が死んだのも田マミが魔法少女にならなかつたのも鹿田まどかを殺そつとして暁美ほむらに殺されたのも」

「田マミと智也、2人で過ごした幸せな日々も、本当だった」

「恋愛感情は勿論の事、愛してたんだろうね、狂うほどの、だから世界改变なんて馬鹿げた事が可能だった……僕には理解出来ないけどね」

「そして彼は田マミの弟として頑張つたが、結果無駄だつたけどね……だから、そつだね、この物語は……」

「田智也の、夢……だつたのかな……ああ全く、人間つて本当に訳が分からぬよ」

自分だつた物を喰い、可愛らしいゲップをした後、キュウベえは去つた。

## 第一話（後書き）

はい、これでお終いです。

題名関係なくこれで終わりです。

今まで事故なみに誤字脱字していると思いますが、なにぶん夜に書いたので、すみません。

今書いてるものも構成できしだい投稿したいですが……そちらは多分亀更新でしょおね、すいません。

それでは、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2987s/>

---

巴マミの救い方

2011年4月18日00時20分発行